

児童・生徒理解に基づく生徒指導に重点をおいた人権教育の推進

～ コミュニケーション能力を育てる教育活動 ～

(広島市立二葉中学校区)

1 研究の焦点

(1) 研究の目標

二葉中学校区で小中連携して9年間の見通しをもって、人権教育の研究実践をすることにより、中学校区児童生徒の健全な育成を図る。

(2) 研究の基本的な考え方

① 児童生徒の実態や課題

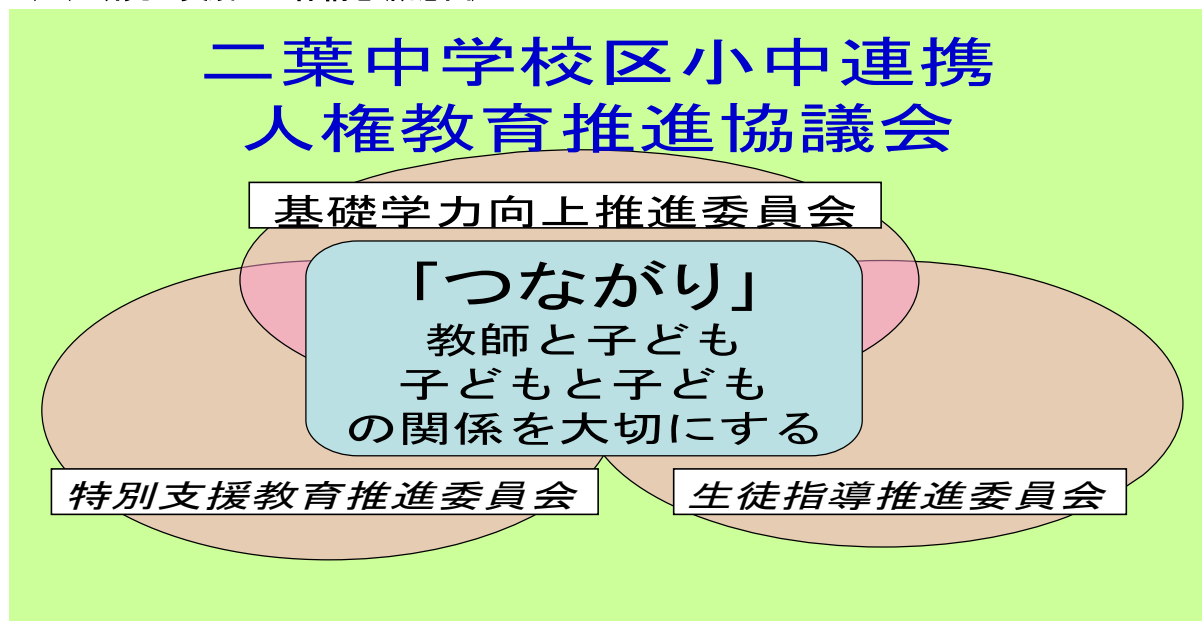
多くの児童生徒は、自己実現のための取り組みや、集団でのかかわりがうまくできている。しかし、集団での関わりがうまくできない児童生徒が、自己実現のための努力を諦めたり、不登校や問題行動に表したりしている。

② 目指す方向性や研究仮説

研究仮説を、良質な人間関係が構築されることにより、いじめ、不登校・問題行動等の生徒指導上の課題が減少するとともに、基礎学力の向上が期待できる。と考えている。

2 具体的実践・研究（取り組み）

(1) 研究・実践の全体構想(概念図)



① 生徒指導推進委員会

児童・生徒理解の視点と取組方法の共有，9年間を見通した生活規範づくり

② 特別支援教育推進委員会

9年間を見通した個別支援シートの作成と活用，児童・生徒の効果的な指導方法

③ 基礎学力向上推進委員会

児童・生徒の実態を把握し，かかわりを大切にしながら，基礎学力の定着に向けて取り組む。

具体的目標は，1. 確かな学力の定着（基礎・基本の定着）

2. 個に応じた支援計画の作成と実践

3. ピア・サポート活動・ボランティア活動の推進

(2) 具体的な実践内容

基礎学力向上の取り組みとして、教科ごとにチームを作り、小中の教員が連携して学習指導に取り組んでいる。また、お互いが認め合い関わり合える仲間としての「協同学習」、そして生活場面での上手な関わり合い方として生かす「ライフスキル教育」にも取り組んでいる。

問題行動や不登校などの生徒指導上配慮を要する児童・生徒や、特別支援上配慮を要する児童・生徒も位置づけることができる授業づくりを行っていくことが必要であると考えて、基礎学力推進委員会、生徒指導推進委員会、特別支援推進委員会が、それぞれ個別の課題と共有する課題について、連携を図りながら人権教育を推進している。

(3) 本校の実践

① 具体的な実践

本校では「つながりを大切にするとともに、自分自身をかけがえのない存在として認め、自分自身も周りの人やものも、どちらも大切にしながら、自分なりの努力や挑戦を継続し、より豊かに生きていこうとする子ども」の育成に取り組んできた。

- 教師と子ども、子どもと子どもの信頼関係を築いていく取り組みとして、ペアやグループによる協同学習に取り組んできた。
- 授業では肯定的評価・考えを聴く姿勢、待つ姿勢のゆとりを持った指導・相互評価を重視する取り組みを実践した。
- 総合的な学習の時間を活用としての「ライフスキル教育」を計画的に行ってきた。
- 学校適応感尺度を用いた児童アンケートを実施して、実態把握および行動変容について調査してきた。

② 実践を通しての結果

- 教師と子ども、子どもと子どもの信頼関係を築く取り組みが、学習意欲の向上や不登校および問題行動等を未然防止する自尊感情の育成につながった。
- 一時的支援一覧表を活用して、ペアやグループによる協同学習の取り組みを推進し、肯定的評価・考えを聴く姿勢、待つ姿勢のゆとりを持った指導・相互評価を重視する取り組みで実践したことで児童それぞれが自信を持ち、課題に積極的に取り組む姿勢が生まれてきた。
- 学校適応感尺度アンケートの活用で、児童の内面実態が把握でき適切に対応できた。

3 まとめ（成果と課題）

人権教育推進の成果及び課題として、次の4点が挙げられる。

- 児童や生徒同士のつながりのある学習を実践することが、学力向上に繋がるという共通認識の下に、中学校区の研究授業や交流がよりすすんできている。
- 小中が組織として同じ方向性を持ち、義務教育9年間を見通して子どもを育てていこうとする意識がより高まった。
- 毎月の生徒指導主事の情報交換会や相互交流会・学校視察会等を行うことで、実態を的確に共通理解することができてきている。
- 小中9年間で子どもたちに、良質な人間関係が構築されることにより、不登校・問題行動等の生徒指導上の課題が減少するとともに、基礎学力の向上が図られるように、連携して取り組んでいる。しかし、限られた時間での授業参観や生徒指導主事情報交換会等の交流では不十分である。今後は方法等を工夫する必要がある。